

隠岐諸島島後の水生植物管見

国井秀伸・国井加代子

(島根大学理学部)

はじめに

昨年夏に島根県沖にある隠岐諸島の島後(どうご)を訪れる機会があり、島内のいくつかの池で水生植物を観察してきた。隠岐諸島の植物に関しては、陸上植物で一連の調査報告があるもの(西上・杉村、1978、1981など)、水生植物に関しては、湿地の植物や浮島を形成している油井(ゆい)の池での調査報告以外(杵村・西上、1977)、見当たらない。そこで、不十分ではあるが、今後の隠岐島での本格的な水生植物調査の予備資料になればと考え、ここに今回の観察結果を発表することとした。

観察方法と場所

隠岐島後には2万5千分の1の地図上に、河川を除く約50の水体が存在する。今回はこのうち訪れやすい(道路から近い)11の池*と1河川で水生植物を観察した(図1)。観察は岸から行い、生育する植物名を記録した。9番の亀の原池と11番の男池ではゴムボートを浮べて周回観察を行った。観察の対象は主に沈水植物、浮葉植物、浮漂植物とし、抽水植物と湿生植物については目についたものを記録した。今回の観察は1985年8月28日から30日の間に行った。

結果

訪れた11の池のうち、4、7、10番の池では沈水、浮葉、浮漂植物は見られなかった。その他の8つの池と1河川において、表1に示す沈水植物7種、浮葉植物5種、浮漂植物1種が見られた。抽水および湿生植物は29種を数えた。一水体当りの出現種数(抽水、湿生植物を除く)は最高で7種(6番の丘野溜池の沈水4種、浮葉2種、浮漂1種)だった。

いくつかの水体の概況を以下に記す。5番の山田付近の池はpH7.2であった。ヒシが優占し、まばらではあるが池全面にロゼット葉を展開していた。ここではヒシの他、イトモ、ホソバミズヒキモ、フサモ、フトヒルムシロを観察した。なお、イトモ(*Potamogeton berchtoldii*

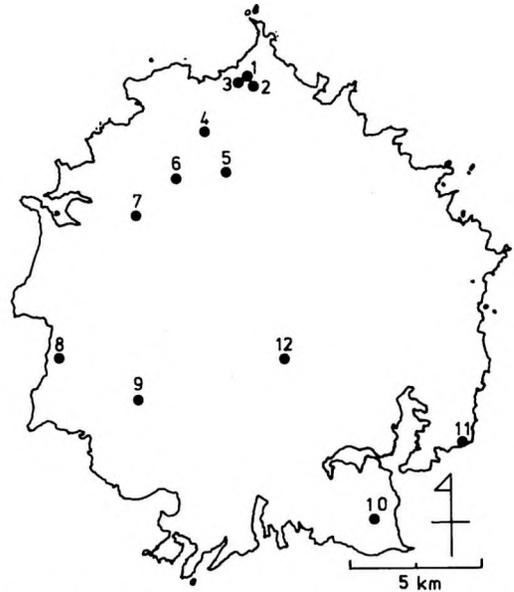


図1. 訪れた12の水体の位置図。それぞれの池のある地図上の地名あるいは名称は、1、2、3は伊後、4は向ヶ丘、5は山田(床山越西)、6は丘野溜池、7は安川、8は油井ノ池、9は亀の原池、10は先岬(空港南側)、11は男池、12は八尾川上西付近である。

Fieber)は、筆者らが1983年より行っている松江市近辺のため池や河川での水生植物相調査で未発見のものであった(国井・国井(1985)および未発表資料)。6番の丘野溜池はアカマツ林に囲まれた窪溜りであった。pHは6.4と弱酸性であった。ここではタヌキモ、フトヒルムシロ、トリゲモ、ホッサモ、ホソバミズヒキモ、フラスコモおよびシャジクモの一種を観察した。

油井の池(8番)には浮島が形成されている。池の周囲は水田および放棄水田となっていて、そこにウキヤガラの大群落が見られた。今回の調査はこのウキヤガラ群落に阻まれて浮島にまで達することができなかったが、杵村・西上(1977)によれば、この池には表2の植物の他、シャジクモの一種やヤナギスプタの生育が認められている。

* ; 実際には14の水体を訪れたが、このうち2ヶ所は埋め立てられており、1ヶ所は水が干上がっていた。

表1. 隠岐島後の12の水体で見られた水生植物。表中の番号は図1中の水体番号を示す。

沈水植物		抽水および湿生植物		シカクイ	
イトモ	5	アオタチカモメヅル	11	テツホツダ	11
エビモ	12	イボクサ	9	ニッポンイヌノヒゲ	6, 9
シャジクモの一種	6	ウキヤガラ	8	ハリイの一種	5, 9
トリゲモ	6	オオハリイ	6	ヒトモトススキ	11
フサモ	5	オモダカ	8	ヒメガマ	9
フラスコモの一種	6, 11	カヤツリグサの一種	11	ヘラオモダカ	6, 9,
ホッサモ	6, 9	ガマ	5, 9	ホソバウナギツカミ	2, 6, 11
浮葉植物		カンガレイ	5, 8, 9, 11	マコモ	3, 11
ハス	9	キクモ	9	マツバイ	11
ヒシ	1, 3, 5	キカシグサ	9	ミクリ	12
ヒルムシロ	8, 9	コサンカクイ	9	ミズユキノシタ	2, 6, 9
フトヒルムシロ	5, 6	コナギ	8, 9, 11	ミソハギ	9, 11
ホソバミズヒキモ	2, 5, 6, 9	サワトウガラシ	9	ヨシ	1, 3, 11
浮漂植物		シロバナサクラタデ	11		
タヌキモ	6	シロネ	8		

9番の亀の原池はかなりの減水状態であった。8月29日の測深では湖心で深さ2.9mであった。水は透明で水底まで見通すことができた。pHは7.4、電導度は129 μ mhosで、底質は砂質であった(灼熱減量は7.5%)。湖心近くにはホソバミズヒキモの大群落があり、やや浅い場所にミズユキノシタ、カンガレイ、ハリイ、サワトウガラシなどが水中草原を形成していた。表1にあげたヒルムシロとハスはそれぞれ小形の浮葉が1枚と5枚水面に展開していたもので、これが減水の影響かどうかは不明である。この池で採集したコサンカクイ (*Scirpus arnensis* Druce) はフトイとサンカクイの雑種とされ、フトイに酷似するが稈の基部が円柱よりやや三角形となっている点で区別される。ただし、大井(1975)や北村ら(1980)にはコサンカクイの記載が無く、この分類については今後さらに検討する必要がある。

男池(11番)は湖心の水深5.5mで、透明度は2.9mだった。pHは表層で7.1だった。電導度は表層で138 μ mhos、水深5mで160 μ mhosだった。水温は表層で31.8℃、1mで31.0℃、2mで30.5℃、3mで29.5℃、4mで24.0℃、5mで19.5℃と3~4m水深に水温躍層の存在を認めた。この池で群生していたヒトモトススキ (*Cladium chinensis* Nees) は別名シシキリガヤと呼ばれ、海岸

表2. 油井ノ池の出現植物(杵村・西上(1977)より引用)。

イボクサ	タヌキモ
ウキクサ	チゴザサ
ウキヤガラ	デンジソウ
エゾノサヤヌカグサ	ハリイの一種
エゾミソハギ	ヒルムシロ
オモダカ	フトイ
カンガレイ	ミクリ
シロネ	ミズオトギリ
シロバナサクラタデ	ミズユキノシタ
セリ	ヨツバムグラ

近くに生育する剛壮大形の多年草で、本州中部以南に生育するという。抽水、湿生植物以外ではフラスコモの一種の切れもを岸で一片見たのみで、その他の水生植物は生育していない様子だった。なお、湖心の底泥の灼熱減量は11.4%であった。

八尾(やび)川(12番)では、上西付近でミクリの群落が見られた。同じ場所にエビモも生育しており、糸状藻類も繁茂していた。

まとめ

今回の隠岐での観察は訪れた水体数が限られたものであったので、詳しい考察は今後の課題であるが、松江近辺で観察した任意の45のため池の水生植物相との違いで注目されるのは、今回の11の池では松江近辺で19ヶ所(頻度42%)で出現したタヌキモ属がただ一ヶ所のみでしか出現しなかったこと、および松江近辺では14ヶ所に出現したジュンサイと10ヶ所に出現したヒツジグサが全く見られなかったことであろう。これがただ単にpH値に依存しているのか、あるいは地史的な問題も含んでいるのかについて、今後他の水体の観察を行って、考察してゆきたいと考えている。

最後に、コサンカクイとシカクイの同定は島根大学の杵村喜則先生にいただいたこと、および現地では西郷中学校の小川俊行先生に車の便宜を計っていただいたことを感謝します。また、隠岐の生物に関しては野津

(1983)によって本が書かれていることを付記する。

文 献

- 西上一義・杉村喜則(1978): 隠岐島油井地区の植生。山陰文研紀要 18: 13-23.
- ・———(1981): 隠岐島都万地区の植生。山陰文研紀要 21: 1-13.
- 大井次三郎(1975): 日本植物誌。顕花編。至文堂。1582p.
- 北村四郎・村田 源・小山鉄夫(1964): 原色日本植物図鑑。草本編Ⅲ。保育社。464p.
- 国井秀伸・国井加代子(1985): 松江市近辺の水草の分布に関する予報。植物と自然 19(11): 31-34.
- 杵村喜則・西上一義(1977): 油井ノ池の浮島植生。山陰文研紀要 17: 1-11.
- 野津 大(1983): 隠岐の生物。読売新聞松江支局。245p.
- 。消えゆく巨大水草オニバス。趣味の山野草 No.62 (1985. 9) : 34-37.
- 。水草研究会。生物科学ニュース No.163: 4-5
- 。水草研究会。植物と自然 19(12) : 26-27.
- 国井秀伸・国井加代子。松江市近辺の水草の分布に関する予報。植物と自然 19(11) : 31-34.
- 小島裕子・榎本 敬。百間川の植物とその移りかわり。植物と自然 19(12) : 19-22.
- 小宮定志。北海道にムラサキミミカキグサを訪ねて。食虫植物研究会誌 36: 137-142.
- 田中 肇。オモダカのコメ受粉。雑草研究 30: 155-156.
- 外山雅寛。北海道樺戸郡月形町よりムラサキミミカキグサの新分布記録。食虫植物研究会誌 36: 118-121.
- 。北海道におけるムラサキミミカキグサとホザキノミミカキグサの生活史について。同上 36: 121-130.
- 。北海道石狩川下流域の沼に分布するタヌキモ科植物。同上 36: 130-137.
- 新見 正。水草を土壌中に混合する事による汚水の脱窒工法について。土壌浄化法研究 No. 2: 1-2 [水草研究会報 No.13の再録]。(次号に続く)
- 文献リスト<1985-2>
- 青山 勲・西崎日佐夫・八木正一。ホテイアオイを用いた水質浄化の評価。ホテイアオイ研Newsletter No.7: 2-6.
- 今岡 務・寺西靖治。ホテイアオイの栄養塩吸収能を利用した水質浄化に関する研究。水質汚濁研究 8(5): 52-60.
- 岩崎桂三。ホタルイ類水田雑草の防除に関する生理生態学的研究。雑草研究 30: 93-106.
- 氏家淳雄・栗田秀男・峰村 宏・矢島久美子。尾瀬沼における帰化植物「コカナダモ」の侵入について。群馬県衛生公害研年報 No.17: 152-157.
- 大隈光善・千蔵昭二。筑後川下流域のクリーク雑草「チクゴスズメノヒエ」の生態と防除。第6報。法面への引き上げと除草剤による防除。雑草研究 30: 208-212.
- 岡村大一郎。ホテイアオイとし尿混合メタン発酵について。ホテイアオイ研Newsletter No.7: 6.
- 沖 陽子。フロリダのホテイアオイに関する実態報告。ホテイアオイ研Newsletter No.7: 10-11.
- 角野康郎。兵庫県東播磨地方のため池における「チクゴスズメノヒエ」の分布-類似した生態的地位を占めるイネ科水生雑草3種との比較。雑草研究 30: 47-50.